

私は机に座り、アルバムと共に見つけた、恩師、宗方が生前に記した日記帳を読みはじめる。その日記帳の黒いインクで記された一頁目には日付が無く、ただ紙面の中央辺りに一つの文章が書かれているだけであった。

——明日、新しい女中が来る。もしこの賭けが私の負けであったならば、日記帳は白紙のまま放置される事になるだろう。しかし、その可能性が低い事は確かなはずだ——

そして次の頁から日記の本文がはじまる。

宗方と彰子の夫婦の寝室のドアが遠慮がちにノックされ、ブランディ、カミュを注いだ2つのグラスを盆に乗せた雅美が入ってきた。

夜着のローブを羽織った宗方が、椅子に座ったまま彼女の差し出すグラスを取り、言った。「初めての仕事で疲れただろう、今日はもういいから部屋に下がって休みなさい」

その言葉に、今朝この屋敷にやってきてからの新しい仕事に正直、目まぐるしさと緊張を覚え、疲労を感じていた雅美が頭を下げる。

彼女のまだ幼さを残した顔に微笑みが浮ぶ。

「ありがとうございます。ではそうさせていただきます。旦那様」

そして彼女は振り向こうとしてふと気づき、宗方の隣でテーブルに座る彰子に向かって改めて頭を下げた。

「お休みなさいませ、奥様」

その彼女の言葉に彰子が微笑む。

「お休みなさい。ご苦労さま」

彰子にまっすぐに見詰められると、雅美は頬を染めた。今朝初めて顔を合して以来彰子は彼女のほのかな憧れの対象となっていた。彼女の年の離れた姉と言ってもいいほどにしか2人の間に年齢の差は無かったが、雅美は彰子の中に彼女が一生かかっても決して得られないだろう、女の品というものを感じていたのだ。

「はい、ありがとうございます」

そう答え、もう一度彰子に頭を下げて部屋を出ていく雅美を、宗方がカミュを口に運びながら見詰めていた。

ドアが閉まる低い音が寝室に響いたとき、そんな宗方の視線に何かを感じ取った彰子が彼の横顔を見る。

就寝前のブランディ。それを宗方が雅美に命じたときから、彼女は一抹の不安を押さえ切れなっていた。夫であり、そして彼女の陵辱者でもある宗方は、彼女を求めるときには決まってその前に、まるで儀式のようにカミュを嗜むのだ。

だがまさか、雅美がやって来たこんな日に？ 今夜からは昨日までとは違い、この屋敷には雅美が同居しているのだ。決して他人には見せることができない夫婦の間の淫ら極まりない秘密の行為の数々。

宗方がグラスのカミュを一気に飲み干す。その時、隣の部屋に雅美が入った事を知らせる微かな音が壁越しに伝わってきた。

その音を聞いたとき彰子は、何故今日になるまで宗方がこの屋敷での雅美の居室を決めなかったのかという事に気づいた。

そしてその事を聞いた時より、わざと心の底に押さえつけていた疑問が明確な答えとなって今、

彼女の目前に存在していた。宗方の横顔。それは彼女が彼の妻となって初めて、その身体を苛まれた時に彼が浮かべていた貌であったのだ。

宗方がブランドイグラスをナイトテーブルの上に置いた。

「脱ぎなさい……彰子」

自分を見詰め、そう言った宗方の言葉に彰子が息を飲む。

「今日は許して下さい、貴方。隣には……あのこが……」

「あのこはまだ十六、まだ子供だ。何も解りはしまい。そうでなければ、私が何故隣りの部屋に入れるのだ」

しかし宗方の浮かべた表情は、その言葉を裏切っていた。手が彰子の乳房に服の上から触れる。

「さあ、早く」

彰子が反射的に身を反らす。

「嘘です、貴方は嘘をおっしゃってますわ」

宗方が彰子に近づき、片方の手で逃げようとする彰子の身体を抱き、そしてもう片方の手で乳房の柔らかさをゆっくりと摩りはじめる。

「お前が声を出さなかったら隣には聞えないよ……。出さなかったらね……」

「そ、そんな……」

彼女の次の言葉は、唇に押し付けられてきた宗方の唇によって塞がれる。

身体を抱しめられ、噛み閉めた歯を割って口の中に舌先が侵入してくると、彼女は半ば反射的にそれを受け入れてしまう。

宗方が長い口付を終え、彰子が閉じていた瞳を開いたとき、その目が驚きに見開かれる。

宗方が、いつもはベッドの下に隠してある秘具を収めた黒い箱を床の上に引きずり出していたのだ。

彰子の恐怖を湛えた目がそのケースに注がれる。

「嫌。お願いです、貴方。その道具はお使いにならないで、それはあまりにも惨いですわ……」

全部、全部あのこに聞かれてしまいます」

宗方は彰子の言葉を見無視し、箱の中から手錠を取り出す。その表情は彰子の抵抗を押し止めてしまう程に、欲情にたぎったものに変化していた。

「聞かせてやるんだよ、彰子。男と女が行う営みをな、そしてあの娘の中に眠る女の欲情を引き出してやるんだ」

彰子はそう言放つ宗方の瞳を覗き込む。それは、彼が彰子を嬲り苛む時に感じる苦痛とそれを凌駕する快樂の中で見た覚えのあるものだった。

「ゆるして……」

彰子が小声で哀願する。しかしそれは既に、諦めとともに運命を受け入れはじめた者の声でもあった。

「服を取るんだ」

宗方が再び彰子に命じる。

おずおずと彰子が服のボタンを外しはじめ。下着姿になった時、暫しの躊躇を見せ、そして思い切ったように下着に手を掛ける。

その前では宗方が、彼女に見せ付けるように、床の箱から取り出した淫具の数々をテーブルの上に並べて行く。

その淫具を見詰める彰子の表情を楽しみながら。

隣りの部屋では、雅美が寝間着に着替え終り、ベッドに入ったところだった。

生れて初めて身体を横たえるベッドは、少し柔らかすぎるように思えて頼りなげであったが、それはそれで何処か心をときめかすものがあつた。

疲れてはいたが、若く健康な彼女の身体は、生れて初めて経験する新しい仕事への興奮の為か、すんなりと眠りに入いつて行くのを拒んでいた。

雅美は寝返りを打ち、真新しいシーツの香りを胸に吸い込む。

彰子が最後の下着を取り、裸体を宗方の目に晒す。

その前方では、宗方が彼女の身体に手を触れることもなく、ゆっくりと視線を這わせていく。幾度繰り返されても慣れる事がない、この宗方の性癖。彰子が最初にその試練を受けたのは、

あの居間のシャンデリアの下でだった。こうこうとした光の中で、服を剥ぎ取られた裸体を縄で縛り上げられ、まだ宗方を、男を知らなかった身体を開かれ、秘密の全てをむき出しにされたあの時。

彰子の中に、じわりとした恥辱の念と昂ぶりが生じる。

あの時、宗方が触れようともせずに見詰めつづけた私の身体。いっそ触れられ、そして抱かれたほうがどんなに楽だっただろう。ただ見詰めるだけの、粘りつくような、心の中に折りたたまれ隠されている私という存在の全てを見通すような彼の視線に、私はいつしか哀願の声を上げていた。

——「お願い、いっそ、いっそ抱いてくださいませ」——

だが宗方はその声にすすり泣きの声が混じるまで、決して私には手を触れようとはしなかった。そして私は、彼に見詰められながら淫らにも秘部を濡らしていた。

そう、確かにあの時からだ。私の中には私の知らぬ誰か別の「女」が存在し、そして常に外に出ようと蠢いているのだ、という事を意識しだしたのは。

彰子が小さくため息のような息を吐く。

私は知っていたのだ。宗方が、夫が、雅美を雇い入れると言ったその時から……。

そう、先ほどの彼との会話はただの儀式。通り抜けることが必要だった儀式にしか過ぎなかったのだ……。

じわりと、股間の中心に熱い昂ぶりが生じる。

彰子に身体を寄せた宗方が、彼女の両方の乳房に触れた。

「あつ……」

彰子が低い声を上げる。だが彼女はもう身を引くこともなかった。

宗方が乳房を軽くもみ上げながら、柔らかな刺激を送りはじめ。

手のひらがごく軽く乳首に触れた時、彰子の口から小さく声が漏れ、乳首が起立しはじめる。

そんな乳首をつままれると、指の間で、陰った色合いの突起が固くなっていく。

宗方はそんな彼女の反応に薄く笑いながら、両方の乳首を指で刺激しつづける。そんな柔らかすぎる刺激に、彼女の中にもどかしさにも似た、せつないような感触が生じ、吐く息が細かく途切れる。

そんな彼女を知り尽している宗方が、その耳に囁きかける。

「どうして欲しいんだ？ 彰子」

彰子が顔を背ける。

「うっ……ん……、嫌。そんなこと言わさないで下さい……」

指が更に刺激を弱める。

「あつ……嫌……」

「どうして欲しいんだ？ 言うんだよ彰子」

「……っ、強くして……もつと強く……」

宗方がその言葉を聞いた途端に、両方の乳首をまるでひねり上げるかのように、指に力を入れる。指の間で起立した乳首が歪む。

「あつ！ 痛い……っ」

「あつ……っ」

彰子が思わず声を上げ、そして再び、柔らかな刺激がはじまる。

「あああ……」

強弱を繰り返す宗方の乳首への責めが数回繰返された頃、彰子の瞳にはつきりとした欲情が翳る。

宗方がテーブルの上から鞭を取る。

彰子が恐怖の目を宗方に向ける。

「ああ、お願い、それはお使いにならないで、隣に聞えてしまいます」

「聞かせてやるのさ」

宗方が残酷な期待を込めて言い放ち、鞭を彰子の乳房に向けて振った。

「！」

鞭の先端が乳房の上で爆ぜると、彰子が絶望の入り混ざった悲鳴を上げた。

小さく掠れた彰子の悲鳴が、隣の部屋の雅美の耳にとどく。

彼女が閉じていた目を開く。

何の声なの？

そしてその悲鳴よりも低い、何か鋭い物が柔らかい物を打つ時の音が連続的に聞えはじめる。

そしてその音に合わせるように繰り返される悲鳴。

雅美はベッドから身を起す。

赤い鞭跡が幾本も交差する彰子の乳房に、宗方が唇を寄せていく。

乳首を咥えられ、舌先で愛撫される彼女の目が焦点を無くしはじめ、腕が胸の宗方の頭を抱え込み、指が髪の毛を乱す。

宗方が急に、乳首に歯を立てた。その鋭い痛みにも、反射的に身体を逸らそうとする彼女を宗方の手が押し止め、反対側の乳首を咥える。再び、優しいともいえる舌が、彼女の乳首を舐めはじめ、しかしその愛撫を受ける彼女の目にあるのは、もう一度乳首に歯を立てられる事への期待であった。

その彰子の期待をはぐらかすかのように、宗方が乳首から顔を離す。

「後ろを向いて、背中に手を回すんだ」

宗方がテーブルの上の手錠を取り上げると、彰子は低くすすり泣きの声を上げた。

どんなに哀願しても、もう宗方は陵辱を止めようとはしないだろう、両手を手錠で拘束され、思いのままに身体を廻られ、これから何度も恥辱に塗れた絶頂を強制されるのだ。宗方が中に潜む貪欲な淫獣が腹を満たすまで。

そして彰子は、これから自分に対して行われるであろう行為を、どこかで待ち受けている自分が己の内に存在していることも又、自覚していた。そしてその自覚が彼女に自己憐憫の涙を流させるのだ。

彰子は宗方の言葉に従い、背を向け、両手を背中に回す。

冷たい金属の感触、そしてカチリと鳴る手錠の音。その音は彼女にとって苦痛と恐怖への序曲であった。

しかしそれは、蜜の味がした。

ベッドに半身を起した雅美は、完全に眠気が消え去ってしまった事を自覚する。

あの音が聞えてからあとは、隣の部屋からは声とも聞き取れないほどに不明瞭な声が聞えるだけとなっていた。

雅美は耳をそばたてる。

両手を背中中で拘束された彰子が、脚を九十度近くも開いた格好で立っている。

そんな彼女の前には、宗方が床に座り込んでおり、ちょうど目の前の位置にある彼女の太股の付根を両手で押し開くようにして、その奥に秘められた箇所を覗き込んでいる。

「濡れているぞ……彰子」

宗方がからかうような口調で言った。

「ああ……そんなこと言わないで下さい……」

彰子が顔を逸らし、小さく声を上げる。しかし宗方に晒す下半身はそのまま動く事はなかった。

宗方が、飾り毛に囲まれた、内部の繊細な桜色の箇所をのぞかしている彰子の外側の襞の左右に両手の親指を当てる。

その感触に、ぴくりと彰子が太股を震わせた。

宗方が柔らかな肌色の襞を、親指でゆつくりと押し広げると内部から女の匂いが漂い出し、内側の複雑に絡まり合う桜色の肉襞が愛液で濡れ光っているさまが剥き出しにされる。

更に宗方は彼女の性器を押し開きつづけ、粘膜質のその箇所が張りを見せ、襞が一ヶ所に寄集まる頂点にある陰核までをも剥き出しにし、指でつまみ上げた。

彰子はその快感に腰を震わせ、声を上げる。

「嫌……あつ、そこは」

宗方がつまみ上げた陰核をゆつくりと揉みはじめる。指の腹でその敏感な突起を弄られる度に、彰子の太股がびくりとした痙攣を繰り返す。

「どうだ、乳首よりも感じるだろうが……」

彰子は、漏れだそうとする声を懸命に押え、荒い息をつく。

宗方が食入るような視線を受けて、彰子の肉襞が、臍口から漏れだした愛液を絡め取り、そして白濁した粘液の糸を引く。指の間で陰核が固い芯を持ちはじめ、更に硬くなっていく。

彰子が声を漏らしはじめる。

宗方が両手の親指を彼女の淫核付近の粘膜に押し付け、一気にその表皮を根元までずり下げる。瑤瑤色の固く勃起した艶々とした突起が剥き出しにされる。

彰子が半ば悲鳴のような音を立てて息を吸い込む。

宗方が彼女の下腹部に顔を寄せ、剥き出しになった陰核を唇に挟み込む。

敏感な肉の芽を弾くように舐め上げられ、柔らかく押し潰すようにして舌先で愛撫されると、彼女は性器から腰に掛けて強い快樂の波が走るのを感じる。そしてその快樂の波は背骨を通じて駆け昇り、彼女の脳裏を真っ赤に染め上げる。

それは欲情の色であった。

彰子の脳裏から全ての感情が消え去る。

「ああああっ……」

その隣からの彰子の声は、雅美の耳にはつきりと聞えた。

雅美はびくりと身体を震わせる。

あの声は……奥様と旦那様の……閨での……。

雅美は自分の顔が火照って行くのを感じる。話には聞いていた事がある、男と女の秘めた営み。

雅美は一瞬、清楚な雰囲気を持った彰子の姿を思い浮べる。

あの奥様があんな声を……。

雅美はその声を聞く事を拒否しようと布団に潜り込む。しかし隣からの彰子の声は容赦なく布団を通して雅美にとどく。

彰子の太股に、膣から漏れだした愛液が糸を引き、絶頂が真近な事を知らせるかのよう大きく震えだした時、宗方は彰子の陰核への愛撫を止める。中断された快樂に彰子の息が途切れた。

宗方が冷酷な声で命じる。

「ベッドに上がれ、尻を鞭打ってやる」

彰子が両手を拘束された不自由な格好でベッドの上に這い上がり、尻を宗方に向けて掲げる。

「もっとだ、もっと尻を突出せ、お前の淫らな濡れた所を剥き出しにしろ」

宗方が残酷に命じ、彼女はその言葉に従い、背中を反らせて脚を身体の下にたたみ込むようにして尻を突き出す。

宗方は腰のくびれと尻の曲線を強調するそんな彰子の姿と、尻の半球の狭間で、厚い肉に挟まれ、欲情の愛液を垂れ流している秘部と、そのすぐ上で固い窄まりを見せる後孔とを欲情に濁っ



た目で見詰める。

「いく時は言うんだ、鞭打たれて達した事を教えるんだ」

その言葉に彰子がすすり泣く声とうなずきで答えると、宗方が鞭を大きく振り上げた。空を切る鋭い音が彰子の耳にとどくと、彼女の性器と、その上の後孔がまるで鞭打たれる事による苦痛を待ち受けるかのように窄まった。

尻肉の狭間に、愛液がしたたる。

まただ……またあの音、何かが柔らかい物を打ち据える時の音。

雅美は、布団を通してさえ聞えるその隣からの音に耳をすます。

いえ、違う……今度の音は……声が混ざっているわ、奥様の声……。じゃ、打たれているのは……奥様？ で、打っているのは旦那様……。

でもこの奥様の声は……何だか……とつても変……。さっき聞えた男と女の閨での声みたい……。

その時、雅美の脳裏に恐怖にも似た考えが過る。

昔、どこかで漏れ聞いた事、女の身体を苛む事を楽しむ男と、苛まれる事を楽しむ女の事。

まさか……まさか……まさか。

雅美は身をすくませ、己の身体を抱しめる。そしてその時、固く寄り合わせた脚の頂点で疼くような感触が生じる。

嫌っ……

雅美が小さく声を上げ、両手が耳をふさぐ。

だがそれでもなお聞こえてくる鞭の音。そしてその音に混ざり合う彰子の悦びの声。

彼女の耳に容赦なく彰子の声が染み込みみつづける。

彰子は、尻を鞭打たれる度に身体の中の肉欲が膨れ上がっていくのを感じる。

尻は熱く火照り、痛みは即そのまま快楽に転じ、そして性器の奥底に存在する女の快楽の座からは耐え切れないほどの欲情が滲み出す。

彼女の肉襞は、その開いた狭間の奥から滲み出した欲情の証である粘液によってぐっしよりと濡れ、それが股間までを濡らして行くのがわかる。

唇からは止めなく、意識しない喘ぎの音が漏れだし、もう何も考える事など出来はしない。

ベッドの上で拘束された不自由な身体を、快楽と苦痛に悶えさせる彰子の、尻の狭間に向けて宗方が鞭を振るい下ろした。

鋭い苦痛が性器と後孔に弾け、彼女は甲高い悲鳴を上げる。しかし、その鋭い苦痛は、例によってそのまま鋭い快楽に変貌し、更に彼女を絶頂へと向けて押し上げる。

宗方の荒い息遣いが聞える。

その音が、鞭を振るう宗方の姿を彰子に思い描かせ、そして彼が打ち据えているだろう、自分の尻の惨状を想像させる。

腰の細い線から急な曲線を描き出す豊かな尻肉。大きく開き、その奥の濡れた二つ肉穴を晒け出しながら鞭打たれ、傷つき、腫れる尻房、愛液に濡れ光る太股。

宗方がひときわ力をこめて鞭を尻の狭間に振るい、左右に広がってその奥の敏感な粘膜を剥き出しにしている肉襞を打つ。

鞭が尖った陰核を打ちのめし、その途端、急激に込み上げてきた絶頂の波が、彰子を翻弄する。

自分の傷つき、痛めつけられているだろう尻と性器と後孔を思い、そのぞっとするような恐怖が彼女の中で強い快楽に置換られ、彰子は絶頂を告げる悲鳴にも似た声を張り上げる。

「ああ！ いきますわ貴方、もつと、もつと打ってっ！」

宗方が再び、彰子の性器と後孔を打つ。

濡れた音が響き、彰子の視野が白く飛び、身体が激しく痙攣する。

「あ……ああああっ」

彰子が絶頂の叫びを上げる。

その声ははっきりと雅美の耳に届いた。

彼女は知らない間に涙を流していた。その涙は心の中で創り上げていた偶像たる彰子の姿が崩れ去った事によるものと、まだ自覚されてはいない自分の中で目覚めはじめた、ある衝動への恐れと、戸惑いによるものだった。

彼女は、自分でも気がつかない内に太股を強く寄り合わせ、その頂点から生じる、まだ快楽とは言えないほど微かな感触を味わっていた。

確かに彼女はこれまでに数度、月のものはじまる前あたりに、身体に生じた疼くような感触に負けて、自分の乳房に触れながら、股間をなでさすり、その感触を味わった事はあったが、それはいつの時も惨めな気分で終わったものだった。

幼い頃から心に染み付けられた性的な快楽への忌諱が、彼女をそんな気分させたのだ。だが、今その縛めが解かれようとしていた。

あれほど上品で清楚な奥様が、あんな獣のような声を上げるほどの事って……どんな事なの？ それほど……それほどに気持ちが良いものなの？

雅美は寝間着の隙間に手を差し入れ、その奥の乳房に触れる。驚く程に乳首が固くなっていた。指で触れると、そこから生じた感触に溜め息が漏れた。

鞭打たれる事によって迎えた絶頂により、ぐったりとベッドに横たわる彰子に向けて、宗方が鞭を振り下ろした。

鞭は彼女の太股を打ち、鋭い音を鳴らす。

彰子がまだ治まりきれぬ荒い息を吐きながら、時折痙攣を残した身体を起す。

宗方が、そんな彼女を見下ろしながら、スポンの前を開き、勃起した陰茎を取り出して、ベッドの上の彼女に向けて突き出した。

彰子はその途端、両手を手錠で拘束されている事も忘れ、目の前の陰茎に手を伸ばそうとする。

宗方が薄く笑い、そんな彼女の髪を掴んで股間に引き寄せる。

彼女はベッドの上を這い、にじり寄り、欲情の粘液にまみれた陰茎を口に含んだ。粘った男の味が口いっぱいになり、なめらかな亀頭の上を舌が這う。

彰子が唇を強く窄めて陰茎を吸い上げる。前後に顔に揺れはじめると、淫らな舌音がたった。

宗方は、淫茎の中にわだかまっていたものを吸い出される快感を感じながら、うれし気に陰茎を舐めしやぶる彼女の顔を見下ろす。

彰子が顔を上に向け、視線を宗方と合す。そして、自分の舌が陰茎を愛撫しているさまを見せる為になどと大きく唇を開き、舌を亀頭に絡めて見せる。

彰子の唾液と、先端から滲みだす昂ぶりのしたたりとが交じり合ったもので濡れる亀頭。彼女はそれを唇の狭間に挟み込み、舌先で尿道の窪みを舐め上げる。舌に粘液の細かい糸が絡み付き、電灯の光を受けて細い銀の糸となる。

唾液に濡れ光る陰茎を愛しげに頬にこすりつけ、亀頭のくびれ当てた舌を根元に向けて舐め下ろしていったとき、急に宗方が彼女の髪の毛を掴み、引き離れた。

「よし、もういいぞ、彰子。もう一度いかしてやる、脚を開け」

彰子が新たな快楽の期待に瞳を輝かせ、ベッドの上で大きく脚をM字型に開く。その脚の間に、宗方が座り込み、テーブルの上から針の収められた筒を取りあげた。

彰子の目が恐怖の色を湛えた。

雅美が寝間着の前を開いた。

まだ充分とは言えない双つの膨らみの上で、薄く色付いた乳首が己の存在を誇示するように固く勃起していた。

剥き出しの肌が夜気に冷え、白い肌に細かな粟が生じる。

まるで全身の感覚がそこに集中してしまったかのように、敏感になっている乳首に彼女の手が伸びる。指で軽く摘まみ上げたとき、思わず小さな声が漏れた。

彼女は、その瞬間に自分の身体に生じた驚く程の快感を、自分の内側から逃がしたくないとも言うかのように目を閉じる。

もう一方の手が、反対側の乳房に触れ、軽く揉みあげる。

雅美が唇を舐め、そしてその薄く開いた狭間からは途切れ途切れの息が漏れはじめた。

彰子の大きく開いた脚の間に座り込んでいる宗方が、縫針の収められた筒の蓋を開けた。

寝室に微かなエチルアルコールの匂いが漂いだす。

宗方は筒の中から一本の針を振り出し、その銀色に輝いた鋭い先端を見せつけるように彰子に示す。

その針を食い入るように見詰める彰子の瞳。その鋭い切っ先がもたらすであろう苦痛に脅える瞳。

宗方がそんな彼女の、固くなった乳首を左手の親指と人差指で摘まみ上げた。

「ああっ」

こんな時でさえ感じる快樂に、彰子が声を漏らす。

乳首をゆつくりと馴染められると、そこから生じた快樂が股間に向かって這い下りていく。しかしその快樂は、性器を愛撫された時に感じるそれよりも遥かにほのかで、そしてどこかしい。

彰子が腰を妖しく蠢かす。それにつれて宗方の目前に開かれた股間の奥の肉襞がよじれ、まるで垂れ流すかのように一筋の愛液がベットにしたたり落ちる。

宗方が、右手に持った針の先端を彼女の乳首の横腹に当てる。

「欲しいか？ もっと鮮烈で鋭い快樂が欲しいか？」

その言葉によって彰子の脳裏と言うより身体に、宗方の妻となつてから教え込まれた淫らな快樂の記憶が蘇る。

「……はい。下さいませ。旦那様……」

宗方の手に力が加わり、そして彼女は、今針に縫われようとしている乳首を、魅入られた者のように見詰める。

文字通りの突き刺されるような苦痛。

押し殺ろそうとしても、漏れてしまう低い悲鳴が、彼女の口からうめき声となつて発せられる。

彼女にとって、その苦痛はあくまでも苦痛であり、鞭打たれる時のように快樂に置換えられるようなものではなかった。しかし彼女は、その苦痛によって更に欲情を深め、股間を濡らしていく。

それは責めを受け入れてしまう自分の性に対する哀れみと、それによって欲情する惨めさと、そしてそんな自分に対する嫌悪感とが入り交じった感情によるものだった。

宗方が縫針を乳首に貫き通す。

鋭い銀色の線によって一文字に縫われた固い乳首。その両端の小さな穴からは、赤い血が小さな玉となって膨れ上がっている。

その様を見詰める彰子の頬に涙が零れ落ち。それを宗方が舐め取った。

宗方が、もう一本の針を筒から振り出す。

雅美の乳房を揉みあげていた手が、下着に包まれた下腹部に伸びる。

中指で股間を擦り上げると、薄い布の上からでもぼつりとした突起が感じられた。指が円を描くようにその回りをまさぐりはじめる。

むず痒いような快感が下半身に生じ、思わず泣きたくなるような切なさを覚える。

指が下着を通して微かな湿り気を感じる。

息が荒くなる。

声が漏れる。

彼女は、下着の上で緩やかな曲線を描き出している秘部を、手のひら全体で包み込みように股間に当て、太股で強く挟み込み、強弱をつけて左右に動かす。

秘部全体に手が押し付けられ、新たな快樂が生まれる。

ベッドが、気がつかない程に微かな軋みの音を上げはじめる。

二つの乳首を針で縫われたままに、彰子が秘部をまさぐられる。

その宗方の指は、生暖かい愛液にまみれぬめる陰部を蹴りつつける。指が繊細な肉壁を押し広げてめぐり上げ、その頂点の尖りを捉え、そして快樂の中心点をもてあそぶ。

宗方が、指先で快樂を引き出しながら、その快樂に喘ぐ彼女の顔を見詰める。半開きになった瞳、留めなく低い喘ぎを上げる唇、上気した頬、そして顎に流れる銀色の涙の筋。

淫らな音をたてる彼女の秘部から、とどめなく愛液が伝い落ちシーツを汚していく。

宗方が、中指を深くえぐり込むように挿入する。

「あぁっ！」

急に与えられた内側をまさぐられ快樂に、彰子が大きく声を上げる。

宗方の指は、ぬめる肉穴の内部をまさぐり出すように動き、その肉壁の肉のざらつきを擦り上げて刺激する。

陰核の裏辺りをまさぐると違った女肉の手触りが感じられ、そこを強く刺激すると、膣が蠕動するように蠢き、指を締め付けてくる。

宗方が既に中指を挿入している膣口に更に人差指を当て、その弾力のある抵抗感を味わいながら押し入れると、押し開かれるような充実感にも似た快感を感じ、彰子が唇を噛み閉める。

宗方が親指を彰子の陰核に当て、こね回すように刺激しながら、膣に挿入した二本の指を前後に動かしはじめる。

彰子はその快楽に切れ切れの喘ぎを上げた。

「欲しいか？ 彰子」

彼女が、その間に答えようとしないのを見ると、宗方は陰核に押し当てている指の動きを弱める。

途端に彼女が切ない声を上げ、強い快楽を強める為に自分から腰を振り、彼の手に押し付け、上下に振る。

「答えるんだ、彰子」

宗方が、膣の中の二本の指を回すようにして、肉の壁をこね回し、責めたてる。

ついに彰子が、一声大きく喘ぎを上げ、叫んだ。

「欲しい、欲しいですね、貴方のものが、お願い」

その途端、宗方は指を抜き出し、彰子をベッドに押し倒す。

彼女は待ち受けて彼の行動に大きく脚を開き、その脚を掴んだ宗方が更に大きく押し開く。

宗方が、ほぐれ切った彰子の秘部に亀頭を当てる。

「お願いお願い……」

痴呆のように繰り返す彰子。そして宗方は、淫茎全体に絡み付いてくる彼女の膣の感触を味わいながら、陰茎が挿入されていく時の女の貌を見詰めながら、深く腰を押し進めていく。

宗方が彰子の身体を抱きしめたとき、彼女が腰を彼の腰に押し付ける。深く根元まで受け入れた彼女が満足しきった声を上げ、宗方の頬に熱い息を吹き掛けた。

彰子の脚が高く掲げられ、上に乗った宗方の腰を締め付ける。

宗方は針に縫われた乳首と乳房を愛撫しながら、腰を更に強く突き入れ、そして前後に動きはじめた。

寝室に、ベッドの軋みと彰子の喘ぎ声が満ちていく。

雅美の耳に、彰子の上げる喘ぎ声はつきりと聞えた。

その、目覚めはじめた欲情を刺激せずにはおかない声は、一定の調子をもった強弱をくり返している。

あの声……あの声が大きくなる時が旦那様が奥様の中に深く入った時だわ、泣いていらっしやるような奥様の声、そしてベッドが軋むあの音……。

雅美の中に残っていた、最後の快樂に対する忌諱が、膨れ上がった欲望の前で消え去ろうとしていた。

彼女は腰の下着をずり下げ、熱く欲情した秘部に直接指を触れる。

指の狭間に、愛液にまみれた敏感な褌が触れ、その驚くほどに熱くぬめった粘膜質の手触りが、更に彼女を昂ぶらせる。

ああ、もうどうなつてもいい……

雅美は、情欲の求めるままに指を動かす、秘部を愛撫しはじめる。そこから生じる快樂を貪欲に求めながら。

指が陰核に触れる。最初、その箇所に触れた時は、苦痛にも似た感触が腰に走り抜け、指をそらした彼女であったが、もつと鈍い他の部分をまさぐるうちに、その感触を自分が欲している事に気付く。

雅美は恐る恐るといった感じで、陰核に触れた指を動かす。やはり最初に感じたのは苦痛であった。しかしその裏には、身体が震える程に激しい快樂がある事を彼女は既に知っていた。

恐い……。

雅美は、その強すぎる快感に恐怖にも似た感情を抱く。

その恐怖とは、自分がそのものの虜になってしまうのではないかといった恐れであった。

雅美の耳に、絶頂を迎えようとしている彰子の、断末魔の喘ぎのような声が聞える。

声が雅美の最後の抵抗を消し去った。

いいわ、もう、もういいの。

その二度目の彼女の心の呟きは、小声となって唇から漏れだすが、その事にさえ彼女はもう気付いてはいない。

雅美は、勃起した陰核を愛液に濡れた指で摘み上げる。その途端、身体が大きく反り返り、生じた強い快樂の波に、彼女は身を投じる。

彰子の絶頂が真近い事を示す、強い膣の締付けを味わう宗方は、強い射精の衝動にかられ、腰を強く前後に振りはじめた。

腕の中の彰子の身体が、無意識のうちに激しく動き、その身体を押えつけるように宗方が、強く彼女を抱く。

彰子もまた強く彼を抱きしめる。密着した身体が更に密着し、彼女の脚と腕が彼の腰を自分に向けて押し付ける。それはまるで、自分の身体を宗方の身体の中に溶かし込んでしまいたいと言

うかのような、彼女の行動であった。

彰子は絶頂を迎えたその瞬間、喘ぎの息を貫くような叫びを上げた。

「あなたの、あなたのものを、私の中に降りかけてっ！」

彰子の子宮口が宗方の亀頭を激しく擦り上げる。その快感に宗方の視野が白く飛び、うめきの声が漏れる。

次の瞬間彰子は、激しく熱い宗方の飛沫を腰の最深部で感じ取った。

脳裏から一切の思考が消滅した。

雅美は、生れて初めて味わった絶頂の余韻の中にいた。

まるで全身の力が抜けてしまったようにベッドの上に横たわり、次第に治まっていく呼吸に胸を上下させ、気だるさを感じる。

彼女の感じた快楽と欲情の深さを示すかのように、股間近くのシーツには愛液の染みがあった。

雅美はゆっくりと身体を起し、膝の辺りまでずり下がっている下着を脚から抜き取る。ベッドを出て、きつちりと畳んでおいた服のポケットからハンカチを取り出す。

白く清潔なそのハンカチを、自分の欲情の淫らなぬめりで汚すことに一瞬、気後れを感じた。

だが、このまま股間を汚したまま下着をつける事の不快感を思い、彼女はハンカチを濡れた秘部に押し当てる。

ぬめりを拭い取った時、また快感の衝動が芽生えた。

雅美はびくりと身体を震わせる。

どうしたの私……、どうなってしまったの私の身体……

雅美は戸惑いながらも、その衝動を押し殺すように股間と秘部を素早く拭い、下着を着ける。

だが、その下着も又、微かな湿り気を帯びていた。

肌蹴ってしまった寝間着の紐を結びなおし、ベッドに横たわった雅美は、自分の身体の中に秘められていた肉欲という欲望が今夜、開放されてしまった事を自覚する。そして自分は今夜を境にして永久に変わってしてしまうであろう事も。

その彼女の自覚を裏付けるかのように、股間では愛液に湿った下着の微かな冷たさが感じられた。

雅美は布団を頭から被り、どうしても脳裏に浮んでしまう彰子と宗方の姿を追いだそうと勤める。

しかし、それは不可能な事であった。



激しく、淫らな性交の後始末を終えた彰子が、宗方の横たわるベッドの隣に身体をすべり込ませた。

まだ息に軽い余韻を残す彼女が、隣の宗方に囁く。

「悪い人だわ……貴方は」

宗方が身体を彰子に向け、その形の良い耳元に声を吹き込む。

「悪人？ 私がかい？ 私は雅美に無理強いしようとは思ってはいないのだよ……」

彰子は、宗方が雅美を呼ぶのに「あの娘」という表現をやめ、初めて名前を直接呼んだ事に気付く。

そしてその事が彼女に、雅美がこれから経験するであろう事と、自分と雅美、そして宗方の三人がどういった関係に置かれるかと言う事について思いを馳せさせた。

「怖い方だわ……貴方は」

そう呟く彰子の唇に、宗方が軽く唇を触れてきた。

「私はもし雅美が、本当の意味で私達との行為を嫌うようだったら、あの娘に手出しはしない……。今夜の事は一種の賭けなんだ」

「私達って？ 貴方はまさか……」

宗方が彰子の髪の毛に触れ、彼女の目をまっすぐに覗きこみながら囁く。

「そうだ……。私は知っているよ……彰子、お前が今の私達のいとなみに飽きはじめている事だね。新しい女が加わると、もっと刺激的で淫らな楽しみが増えるのだよ、そうだろう……」

彰子は、その言葉を反射的に否定しようとして口を開きかける。そして、もしその宗方の言葉がこれほどまっすぐに自分を見詰めながらのものでなかったら、彼女ははつきりと否定していた事だろう。しかし……。

彰子は、宗方の言葉によって自分でも自覚していなかった己の身体と心の変化に気付かされた。確かに、初めて彼から責めを受けたときは驚愕を覚え、死んでしまいたい程の恥辱を感じた。しかしそれが繰返されるにつれ、しだいに驚愕は楽しみに変化し、恥辱は快樂となっていった。

そして今は……？

彰子は自問する。そしてその答えは最初からそこにあった。ただ単に自覚していなかっただけのことなのだ。

そう、確かに今は、あの当初の身体が引裂かれてしまうように思えた快樂は無い。

私の身体は、女の身体は、これほどまでにも罪深いものなのだろうか……。

彰子を見詰める宗方の視線が、彼女の瞳が浮かべた感情を読み取る。それは了承の色であった。

宗方が冷たい微笑みを浮べる。

「怖い方だわ……本当に貴方は……」

彰子が一抹の恐怖にも似た感情を込め、呟く。

宗方は、そんな彰子に覆い被さり、先程とは違った深い口付を行う。

自分の舌をまさぐる宗方の舌に答えながら、彰子は雅美の事を思う。

多分、いや、きっとあのこは宗方の思い通りになってしまうわ……。私がそうだったように。

私の中に秘められていた情欲を引き出した宗方の手にかかって、あのこも身体の中に秘めている筈の、女の性を引き出され、恥辱にまみれた快楽を仕込まれ、そして女となるのだ。

彰子は激しく舌を動かし、宗方を強く抱しめる。そして、雅美を禁断の快楽の世界に誘い、宗方と共に彼女の身体を犯し、彼女とともに身体を並べて宗方の責めを受ける事を想像し、激しい欲望が身体の中に湧きあがって行くのを感じる。

彰子は、強く抱しめ返してくる宗方の腕の強い力を感じながら自覚する。

自分は、その三人での淫らな行為を楽しむだろう事を、そしてそれを心待ちにしている自分と……。



あの夜から雅美は、自分が確かに変わってしまったと言う事を自覚せずにはいられなかった。毎夜、ベッドに入る都度、肉欲と表現してもよい欲望が彼女を襲い、そしていとも容易くその欲望に屈伏してしまう自分が、どこか不思議にさえ思えた。

今夜もまた雅美は、隣の寝室からの閨の声を聞き、そしてすっかり習慣となってしまった、淫らな自慰の指を下着を取り去った剥き出しの秘部にあてがう。

隣から宗方の声が聞える。

「後ろを向きなさい」

雅美は、息を殺して壁越しの声を聞く。微かに金属が触れ合う時の音が聞え、ベッドが軋む音が続く。

雅美が心の内で呟く。

ああ、今日もまた、奥様は手錠をかけられているんだ……。

そして、隣の寝室で彰子がとらされているだろう姿勢をまね、ベッドの上でうつぶせになり、膝を立て、脚を折り曲げるようにして腰を突き出す。

「身体の方はすっかり準備が出来てるようだな……」

からかうような隣からの宗方の声。

想像の中で彰子と自分とを同化する彼女にとっては、その声が、自分に向けられたものであるように思える。

彼女は決して口には出さない声で呟く。

はい……旦那様。その通りでございます。

金属の触れ合う音に混ざって、彰子の上げる快楽の音が聞こえはじめた。

雅美は、その声に合せるように、自分の手を腹の下からくぐらすようにして股間に伸ばし、秘部に触れる。

そして宗方の指がそうであろう動きをまね、膣口の周辺を舐り、陰核に触れる。指先に、膣口から滲みだしている愛液の細い銀色の糸が絡まり、声を押え込む為に唇が噛み締められる。

一際、大きな彰子の声。

あつ、旦那様が指を入れられたのだわ……。

雅美が指を曲げて、まだ男を知らぬ膣口の内側に触れる。そんなごく浅い挿入でさえ、背中が震えるような快楽が一瞬走り抜けた。

指を奥にまで入れたら、どれほど気持ちがいいのかしら？　そしてその指でお腹の中かをまさぐられたら？

でも……でも駄目……怖い……。

彰子の快楽の喘ぎがつづく。

雅美は、彰子と快楽を共にするかののように、自らの秘部を舐りつづけ、指に愛液を絡め取る。すっかり欲情の蜜をまぶした指を、陰毛のきわで尖りをみせる陰核にあて、軽く押付けるようにして動かす。

自分の身体から快楽を引き出していく、そんな時の彼女の表情は、すっかり淫らな行為に浸り切った女のものであった。

雅美は目を閉じ、隣からの声を聞き取ろうと神経を研ぎすめます。

そうすると聞えるはずもない、宗方の指が彰子の濡れた肉壁をまさぐる舌打ちの時のような音が聞こえるかのように思える。しかしそれは勿論、隣からのものではなく、彼女の股間からの音であった。

彰子の声がとまり、そして再びベッドが軋む音。

宗方のうながす声

「さあ、口で楽しませておくれ……」

雅美は指の動きを止める事なく、隣の部屋で彰子が宗方に行っているだろう行為を思う。

最初に彼女が、彰子は口に宗方のものを受け入れて、舌で舐めているのだという事に気付いた時、強い驚きを覚えたものだった。

彼女にとっては男のその部分はいくまで排泄器であり、そんなものを口に含むという行為は到底、受け入れる事など出来ないものであった。しかし今のように自慰の快楽に溺れ、肉欲に心を乱される時には、逆に男のものを口に含んで舌を絡ませ、その感触を味わってみたいように思えるのだ。

雅美は知らず知らずの内に口の中で舌を動かし、男のものの感触を想像する。

唇の端から、喘ぎの息とともに漏れだした涎が、ベッドシートに染みを付けていく。

再び、宗方が身体を動かす気配がする。

宗方の声。

「今日は久しぶりにここを舐ってやろう……」——「嬉しいかい？、彰子」

少しの間。

低く押し殺した彰子の声。

「うっ……」

間。

彰子の、はっきりと快樂を示す声。

「ああっ……」

再び宗方の声。

「ほう……よく締付けるものだ、指が痛いくらいだよ」

彰子が上げる連続したうめき声。

宗方の声。

「久しぶりにここに指を入れられるのはどんな気分だい？」

途切れ途切れの彰子の声。

「いや……お聞きにならないで」

間。

「ああっ、いや、指を止めないで……もつと舐って、下さいませ」

「答えないからだよ……さあ、どうだい？」

「……は、はい……気持ちがいいです……」

「どこがだ？、どこが気持ちがいいんだ……」

間。

「……お尻が……お尻がとっても……」

「ふふ……素直な女は好きだよ……ほら、御褒美だ」

「ああっ、きつい、きついです……指を二本も入れられたら……私、私壊れてしまいます……」

「身体は別な事を言ってるようだな……前からの淫らな汁が太股まで溢れているよ」

彰子のすすり泣く声。

雅美はいっしか自慰の指を止め、その隣からの声に聞き入っていた。

お尻……お尻で……、奥様はお尻を指で舐られているんだ……そんな、そんな事。

否定しながらも雅美は、恐々に秘部の上で固い窄まりを見せる後孔に指を伸ばし、軽く触れさせる。

その時、隣からの彰子の快樂に泣く声が、雅美を急ぎ立てるように調子を上げた。雅美は、愛液に濡れた指の腹で後孔の表面をゆっくりとさすりはじめた。

後孔の上で愛液がぬめり、指が固い窄まりをほぐしはじめた。溜め息をつく。最初その箇所に触れた時には、もちろん快感などは無く、ただそこにあるのは奇妙な感触だけであった。しかしその指の動きを繰り返すうちに、秘部に感じるのとは違った、もっと切なくなるような快感が生じはじめた。

何……いったい何？ この感じ。

指が浅く後孔の中に潜り込む。反射的に筋肉が窄まり、指が締め付けられる。

しかし今の彼女には、先程秘部に指を入れようとした時のような抵抗はない。

指が後孔の筋肉を押し広げるようにゆっくりと中に潜り込む。

「ああ……」

その奇異な快樂に、思わず雅美の唇から声が漏れる。指が、隣の寢室の宗方を真似るかのよう動き、内部をまさぐりはじめる。

雅美が、短く区切ったような息と声を漏らす。自分は異常な程に淫らな行いをしているのだという恐れにも似た感情が、更に快樂を昂め、その行いをつづける指が、ますます動きを激しくしていく。

雅美はうつぶせになり尻を掲げた姿勢のまま、肩と首で体重を支え、もう一方の手を股間で激しく濡れる秘部に伸ばす。指は馴れ切った動きで陰核をまさぐり、その動きと同調させるように後孔の中の指を蠢めかせる。

秘部に感じる深くそして直接的な快樂。後孔の内側で味わう間接的で、それでもどかしい快樂。その二つの快感が彼女の腰の上下から生じ、そしてその中心部で融合する。

雅美の瞳が涙で濡れる。

再び宗方の声。

「さあ、入れてやる。覚悟はいいか？」

「……はい……」

少しの間。

「あつ、ああああ、やっぱりきつい、きついですわ……」

「息を吐くんだ、深く……」

「いやあ……ゆるして、ゆるして下さいませ……」

ベッドが軋む音。そして彰子の悲鳴にも似たうめきの声。

奥様がお尻に旦那様を受け入れているんだ……。この声はどう……。この気持ちよさそうな奥様の声は……。

雅美は、憑かれた者のように二つの手を動かす。

強い快楽が身体を走り抜け、閉じていた目が見開かれるが、その瞳は何も見えてはいない。ただ、自分の脳裏を駆け巡る稲妻のような白銀の光だけが、その内なる視野を飛び交い、そして更に大きく膨れ上り、弾け飛ぶ。

無意識の聲が叫びとなり雅美の唇を裂く。

ベッドの上でうつぶせの姿勢を取り、尻で宗方を受け入れた彰子が、快楽でよじる手でシーツを掴み、歯で噛みしめる。

そんな彼女の尻を両手で掴んだ宗方が、いつその力をこめて陰茎を突き入れる。まるでよじり合わされた太いゴムの輪で締め付けられているような感触を、彼は楽しみ、そして更に腰の動きを強める。

昂ぶりによって流れ出した汗が、髪の毛の生え際から伝い下り、背中をくすぐった。

激しい息をつき、彰子の尻の快楽を貪りながら宗方は、隣の部屋でこの寝室での彰子との行為を聞いているであろう雅美の事を思う。

雅美、お前は今、何をしているんだ？ もう自慰の楽しみは知ったのか？ もうお前の秘部は愛液を垂れ流しているのか？ 自分の身体の奥に潜んでいるだろう肉欲をお前は受け入れたのか？ そして、もう尻の味わいは知ったのか？

そんな宗方の耳に、隣の部屋からの雅美の聲がとどく。それははっきりと快楽の声であった。

一瞬、宗方は自分の腰の下で尻の快楽によがる彰子の声と、その雅美の声とが自分の内で重ね合されたかのように思う。

急激に射精への衝動が昂まった。

宗方が、陰茎を捻りこむように激しく腰を動かし、叫ぶ。

「いくぞ、彰子、もうすぐだ」

彰子はその言葉を受け、尻を宗方の下腹部に押し付け、受け入れた陰茎を精一杯に締め付ける。

精一杯に左右に広がり、その狭間の欲情しきっている2つの個所をむき出しにする彰子の尻は、宗方に押されるままに大きく歪み、そしてその中心部に埋まる彼の淫茎を食いちぎるかのよういきつく締め上げる。

彰子がいつそう激しくなった快楽のままに声を上げる。

「下さい、沢山、私のお腹の中を貴方のもので一杯にしてっ」

そしてその瞬間、熱い飛沫の感触が腹の奥底で弾けた。

彰子の聲が雅美の耳にとどく。

雅美は、さも自分が尻に宗方の飛沫を受け入れたかのように小さく鋭い声を上げ、そして、今夜二度目の絶頂をむかえる。

ベッドが立てる音を気にする事も出来ずに、彼女は身体をベッドに倒す。

脱力感に満ち、徐々に余韻がおさまっていく身体を、乱れた呼吸に揺らしながら彼女は思う。本当に旦那様の陰茎を尻に受け入れたらどれだけの快楽があるのだろうか、と。そして快楽に濁った頭で彼女は想像する。自分が彰子のように宗方に尻を差し出し、嬲られ、犯される事を。

二つの快楽の箇所から抜け落ちた指が、シーツを汚す。

その日雅美は、自慰を覚えてから初めて、汚れた秘部を拭い清める事も忘れ、裸体のままで眠りに引き込まれて行った。

そんな彼女は知るよしもなかった。隣の寝室で彼女の絶頂の声を聞いた宗方が、これからの自分の将来を変えてしまうような決心を固めた事を――

以下、次回へ